生活 今もぎりぎり

全生連集会

保護費削減許さない

全国生活と健康を守る会連合会（全生連）が24日、国会内で開いた集会では、生活保護の利用者が現状を訴えて、「権利としての生活保護の改悪は断固許さない」との決意を固め合いました。

浜松市の山本定男さん

横浜市の金慶玉さん

東広島市の藤岡愛美さん

「いまでも日々の生活を送るのが精いっぱいなのに、安倍政権は『デフレ脱却』として物価を2％上げるといっています。そんな中で保護費が下がり、その上、消費税が増税されたら、私たちは立ち行かなくなります」

こう訴えるのは、東広島市の藤岡愛美（なるみ）さん（65）です。ぜんそくがひどくて仕事ができず、生活保護に。少し歩くと心臓に負担がかかり、薬が欠かせません。「（厚労省部会が保護基準見直しで使った検証方法のように）生活が厳しい人に合わせて生活保護費を下げていけば、日本中貧乏人になってしまいます」

保護利用者の多くがいまの保護費でもぎりぎりの生活を余儀なくされています。

藤岡さんは「水光熱費や電話代に気を使います。電話は極力、自分からかけないように心がけています。それ

べる物を節約するしかありません」と語気を強めます。

横浜市の金慶玉（キム・キョンオク）さん（64）は2010年6月から生活保護を利用しています。「これでホームレスにならずにすんだと、ほっとしました」と当時を振り返ります。同居人の借金を肩代わりさせられた揚げ句に部屋を追い出されたのです。

「自立しようと努力していますが、いまは食べていくのに精いっぱいです」と金さん。「付き合いにはお金がかかりますが、ぎりぎりです。人としての付き合いがないと、希望を持って暮らせません。希望が持てなければ自立に向けたやる気もでません。人間らしく生かしてほしい」と訴えます。

浜松市の山本定男さん（67）は長年、建設関係の仕事に従事してきました。4年半前にヘルニアを患い、生活保護を利用するよう

費が削減されれば、生きていけません。最後まで、あきらめず反対の声をあげてたたかいたい」―。